

「人間を含む大自然は永遠に技術的な或物[とは、「大自然(全体C)⇒技術:関係D1の至大化」の連続的統一物(C)]であつて、しかも、これ[「大自然(全体C)⇒技術:関係D1の至大化」の連続的統一物(C)]以外に如何なる物も存在しない(右枠文傍線部参照)」。

「アリストテレスにおいても、それ(A&B)は飽くまで技術の意味してゐたのであつて、政治、道徳、醫術、土木、建築、工藝、その他すべて(A&B)に通じる普遍的なるものでありました。それ(A&B)は或る一定の目的(自然からの創造力・意思・D1の至大化)を實現する(D2の至大化)爲の意識的な手段」[とは『自然の自己完成を助けるものとして人間の技術を意義付ける(P403)』と同意)。

AもBも、「技術は自然を模倣(関係:D2の至大化)」し、かつ「自然の技術の届かぬ處を穴埋め(D2の至大化)するのが目的」。

自然からの目的・意思

〔A:集團的自我〕

「有用の技術」…政治、道徳、醫術、土木、建築、工藝

〔B:個人的自我〕:「無用の技術」…詩・演劇・舞踊・音楽

〔アリストテレスの『自然學』〕:AもBも「技術は自然を模倣する」(『覺書六』P705)。

*「人間が物を煮たり焼いたりすること(人間の技術)と、人間の体内における消化現象(自然の技術)との類似」⇒「かうなれば、人間の技術もなければ、自然の技術もない」⇒即ち、自然の技術の中に、人間の技術は内包される(小生:意譯)⇒「人間もまた自然物」⇒「人間を含む大自然とは、永遠に技術的な或物[とは、「大自然(全体C)⇒技術:D1の至大化」の連続的統一物(C)]であつて、しかも、これ[「大自然(全体C)⇒技術:関係D1の至大化」の連続的統一物(C)]以外に如何なる物も存在しない(以下項傍線部参照)」⇒「アリストテレスは、『自然』と『技術』とを對立的には考へず、自然も技術を持つてみると見なし、兩者を連続的[技術(模倣:D1の至大化)⇒自然]に捉へる」(『覺書:六』P706)。

*「關係體(小△)を組合せた究極の關係體(大△)を私たちは全體(C)と呼ぶ。その究極の關係體(全體:C)はただ一つしかない。いやしくも世に『存在する』と言ひうるものはそれ(全體:C)だけである。それなら、在るものは關係(D1の至小化)だけ(關係がすべて、の意)である[とは、存在するものは、「全體(C) = 關係(D1の至小化)」だけと言ふ事」] (『批評家の手帖』全七P23)。

*「(アリストテレスは)自然(C)のうちに自己實現(技術)の意思(D1の至大化)を認め、その最後の段階においては、資料はすべて脱落し、全く資料を持たない純粹なる形相、即ち絶對の觀念(C)だけが残ると考へてゐる」(『文學以前』:全四P404)